

こんどうあみだによらいかけほとけ こんどうかんのんぼさつかけほとけ
金銅阿弥陀如来懸仏・金銅観音菩薩懸仏

室町時代後期（永正元年：1504年）

勝鳥神社の2面の懸仏は、いずれもヒノキ材の地板に銅製の鏡板を装して重厚味を加えた懸仏です。金銅阿弥陀如来懸仏は径23.6cm、金銅観音菩薩懸仏は径23.4cmを測ります。2面とも、鏡板は周縁に覆輪を施し、内に1条の圈線を巡らせて内外両区分けています。内区中央には、蓮華座上に坐し、火炎の後背を負った半肉押出の本尊を据えます。本尊の頭上には天蓋、左右には蓮華を挿した華瓶を配していますが、金銅阿弥陀如来懸仏は天蓋・華瓶ともに欠損して遺存していません。本尊の細部は鑿の線刻により表現しています。仔細にみると両者で腕の表現が異なっており、金銅観音菩薩懸仏では手の上下に2孔が穿たれていることから、かつて何らかの法具を手にしていただたものと思われる。外区は金銅阿弥陀如来懸仏は2点の笠鉾と三鈷形金具を、金銅観音菩薩懸仏では瑞雲を打っています。両者とも左右の肩には、懸垂用に比較的大ぶりの獅噛座を置いています。なお、本尊をはじめ天蓋・華瓶、それに覆輪・圈線などはいずれも鋳留めされており、鏡板が銅であるのに対して金銅製です。

裏面を見ると、両者とも2枚の地板を中央で矧ぎ合わせています。そして、そこに墨書銘が認められていますが、黒化した透漆に阻まれて判読できなかったため赤外線写真を用いて確認しました。その結果、

「奉懸天稚社御正躰／阿弥陀 願主敬白／永正元年甲子五月吉」（金銅阿弥陀如来懸仏）

「奉懸天稚宮御正躰／口観音 願主敬白／永正元年甲子五月吉日」（金銅観音菩薩懸仏）

であることが判明し、それぞれの懸仏に尊名を与えることができました。また、これらの懸仏が、天稚彦神社の御正体として永正元年に奉納されたものであることがわかりました。筆跡・作風からみても、同一人物が、同一の作者に依頼して、同時に奉納したものであると思われる。



金銅阿弥陀如来懸仏 表面



同 裏面（赤外線写真）



金銅観音菩薩懸仏 表面



同 裏面 (赤外線写真)

御正体は、本来は神社の御神体として奉祀されたものです。しかし、この頃になると神社仏閣そのものがそうであったように、御正体もまたさまざまな発願者により、さまざまな意図で奉納・施入されるようになります。この懸仏もまたその1例ということになりますが、こうした風習が盛んになり民衆に広まると、懸仏の数が増加する一方で作風はしだいに低迷します。本例の本尊に見られるようなユーモラスとも受け取れる稚拙な表現は、そのことを示しています。しかし、作風の低迷にもかかわらず、民衆の信仰に育まれた懸仏には、民衆の切々とした願意と魂がこもり、信仰の体臭といったものが感じられます。

勝鳥神社の2面の懸仏は、創作時期が明らかであり、当時の民衆信仰を知る上でも貴重な作例といえます。

勝鳥神社の由緒

2面の懸仏は、彦根市の南、宇曾川右岸にある三津町の勝鳥神社に伝来します。勝鳥神社は、古くは神籠神社と称しましたが、明治11年に勝鳥神社と改めて今日に至っています。江戸時代における近江江北6郡の地誌である『淡海木間攬』によると、当社は初め、現在の豊郷町高野瀬にある天稚彦神社の仮殿であり、平時は天稚彦神社の御神体や神宝などを当社において保管し、神事祭礼の際には天稚彦神社へ移したと記しています。現在、勝鳥神社には地藏尊が御神体として祭られるほか、宝永3年(1706)銘の狛犬1対、延宝6年(1678)銘の鰐口などの神宝が伝来していますが、2面の懸仏とともに天稚彦神社由来のものと伝えています。